

# えりも町におけるニホンザリガニに関する記述および 東洋小学校における「総合的な学習」について

中岡利泰<sup>1)</sup> 本山裕一<sup>2)</sup> 鎌田沙也香<sup>3)</sup> 藤井宝顕<sup>3)</sup> 池田良輔<sup>4)</sup>

岩崎直希<sup>4)</sup> 神田裕平<sup>4)</sup> 清水博子<sup>4)</sup> 中村洸司<sup>4)</sup>

## はじめに

ニホンザリガニ (*Cambaroides japonicus*) は、環境省によって2000年に絶滅危惧Ⅱ類に、また水産庁によって1998年に危急種に、それぞれ指定されている。北海道は独自のレッドリストを整理しているが、ニホンザリガニは含まれていない。ニホンザリガニは、湧水または比較的水温の低い清流にのみ生息し、河川改修などの影響によって、生息河川が少なくなってきたと考えられている。

近年、北海道各地で博物館等が主体となり市民などとの協同調査を実施し、ニホンザリガニの生息状況を明らかにするとともに、行政と市民に環境問題を提起している。

えりも町内におけるニホンザリガニの生息に関する総合的な調査はなされていない。ここでは、江戸時代の紀行文に記述されたニホンザリガニの記録を紹介するとともに、平成12年(2000年)にえりも町立東洋小学校3・4年生が“総合的な学習”を視野に入れた「オリエンタイム」の中で調査し、まとめた記録(東洋小学校, 2001)を記載した。また、今回、中岡が考察を加え、再聞き込み調査を行なった。

## 1. 江戸時代の紀行文に記述されたニホンザリガニ えりも町山中に寛政十一年(1799)に開削された

猿留山道(さるる・さんどう)があり、江戸時代多くの旅人が通過し、紀行文を残している(えりも町郷土資料館, 2003)。その中に、猿留山道開削中に旅した谷元旦の「蝦夷紀行」では「サル蟹」と表記している。谷元旦は道東方面から広尾をとおり、えりも町字目黒(旧:猿留)から、山中の猿留山道を通り、えりも町庶野へ到着する文中に記している。

1799年8月18日(旧暦:寛政十一年七月十八日)  
「此處にシャツハイホリという谷川あり、石川にて水清くシャツハツヘツという此の辺の谷、總じてサル蟹あり、少しの間百疋斗りも捕う、又山を登ること二三町にて櫟樹の原にいたる。」

“シャツハイ”は、地名の咲梅で、海岸線にある地名と考えられ、アイヌ語で“サク・パイエ・イ”『夏・(多数で)行く・所』、夏に漁に出かける所と解釈している(えりも町史)。“ホリ”は“ノボリ”のことで『山』、“ヘツ”は『川』を意味している。

引用した文を口語訳すると「ここにシャツハイ山(咲梅山)で谷川があり、石の川で、水が清くシャツハツ川(咲梅川)という、この辺の谷にはすべてザリガニが生息していて、少しの時間で100匹位捕った。次に2~300mでミズナラの原に出る。」となる。

翌日にもザリガニに関する記述があり、  
1799年8月19日(旧暦:寛政十一年七月十九日)

1) えりも町郷土資料館 〒058-0203 北海道幌泉郡えりも町字新浜207番地

2) 羽幌町立羽幌小学校 3) えりも町立えりも中学校 4) えりも町立東洋小学校

「シトマベツを渡り、山道を越え、前路を左に見、林中に行くこと一里斗り、アツフチイヘツの石間を渡る。この川にもサル蟹多し。」

口語訳すると「シトマ川を渡り、山道を越えて、往路に通った道を左に見て、林の中を約4km位行くと、アツフチイ川の石の間を渡る。この川にもザリガニが多い。」となる。

短時間に100匹のザリガニを捕まえたことになると、当時ザリガニは高密度で生息していたと考えられる。また、「山を登ること二三町にて櫟樹の原にいたる」との記述から、沢の上流は豊かなミズナラ林があり、沢の環境がザリガニの生息に適していたことが容易に想像できる。

江戸時代末、1800年ごろには、多くのザリガニがえりも町山中の沢に高密度で生息し、アイヌが捕獲していたことがうかがえる。

アイヌ語でザリガニは「ホロカレイエプ(ホロカ・レイエ・プ)」といい、『反対・這う・物』という意味である(萱野茂, 1996)。捕獲する際に逃走しようとするザリガニの行動の特徴をよくとらえている。

また、更科源蔵(1976)によると、アイヌ語で「テクンペコル・カムイ」『手袋を持っている神』といい、屈斜路湖では、魚を獲る網にかかると「間違っあがって来たようだが、これをあげるから帰りなさい。」といって小さなイナウ(木幣)を背負わせて、決して食べたりしなかったという。しかし、西洋医学が入ってきた幕末の頃から「オクリカンキリ」といって、脱皮する頃の頭の所にある石灰の固まりを、結核の薬にしたため少なくなったと、記述している。

また、千歳辺りでは「ホルカ・レエプ」『後に這うもの』、石狩川筋では「ホルカ・アムシペ」『後戻りするカニ』と記述し、日高沙流谷では雨乞いするとき、カラスガイやカワカジカのように川淵の木の枝

にぶらさげられて「水に帰りたければ雨を降らせて、ここまで水を呼んで帰りナ」と難題をぶっかけられたりする、と記述している。

さらに、松浦武四郎の「天塩日誌」(安政四年1857)の記述を下記のとおり引用している。

「此処喇蜃(チクンヘタル)多しが、土人は是を見るや、味噌を一滴其流れに投ぜしや、小石の間より数十疋出て、其味噌に群れ来る事又不思議と云べし。此玉蠻名をヲクリカンキリとて水腫の薬なりと、此地水腫病多きよりして、此蟹多し。また其能も他に比する時は尤も上品也と、惣て其病有地には其を治する薬品を生ずる事造物主の然らしむる所也とす」とあり、口語訳すると「ここはザリガニが多いが、アイヌがこれを見つけ、味噌をひとつかみ流れに投げ入れると、小石の間から数十匹が出て来て、その味噌に群れて集まるのは不思議といえる。この玉はアイヌ語でヲクリカンキリといって、水腫の薬になり、ここは水腫が多いので、このザリガニが多い。またその「みそ」は、他の地域のものとは比べてももっとも上品な味である。一般に病がある地には、その病を治す薬品があることは造物主がそうしているものである。」となる。

また、寛政四年(1792)の串原正峯の『夷諺続話』巻之二は「舍利蟹の事」を引用している。

「曹谷場所の内同所より壺里半程北シルシと云所に舍利蟹多し、尤松前にも多有るよし、夷言にはタピシトンペコロペと云、形は海老にて蟹のことくなり、此蟹時而有病付尻に玉の如く瘤出来る、此瘤出来ればやがて死するなり、此瘤を取製法なせはヲクリカンキリと云、薬品となる、此蟹味噌を好事本草にも見えたり、シルシの内ライタンネナイと云小川にて味噌を流し様子を見たる所、案の如く蟹集まり出たり、時の間に四五十疋取らへた。

夷どもの云には吞水濁り味ひも悪しき時は右舍利

蟹をとらへ水中に入置けは水よき清水と成」と引用しており、口語訳すると「宗谷場所のここから6kmほど北のシルシという所にザリガニが多い、松前にも多くいる。アイヌ語ではタピシトンペコロペといい、形はエビに似てカニのようである。このザリガニは病になると尻に玉のような瘤ができ、この瘤ができればやがて死ぬ。この瘤を取り、加工すればヲクリカンキリといい薬品となる。このザリガニが味噌を好むことが今回の旅でも見る事ができた。シルシのライタンネナイという小川で味噌を流し様子を見てみると、予想したとおりにザリガニが集まり出てきた、少しの間に4~50匹を捕らえた。アイヌが言うには、飲み水が濁り味も悪い時は、このザリガニを捕まえて水の中に入れておくと水が良い水になるという。」

松浦武四郎は弘化二年(1845)にも、蝦夷地を旅しており、「蝦夷日誌一編卷之六」にザリガニのことを一言記述している。

「レブンキ(略)土産アブタニ同じき故略す。尤椎茸・赤藤被(アツシ)此処上(じょう)とす。ヲクリカンキリもよろし」とあり、口語訳すると「礼文華(豊浦町)(略)産物は虻田と同じなので略する。もつともシイタケ・アツシはこの物を上物とする。ヲクリカンキリも良い。」

「ヲクリカンキリ」とは、ザリガニが脱皮する際に胃にカルシウム分を溜めてできる結石のことで、小児のひきつけ、胃痛、下痢止めの効用があるとされ(長崎大学薬学部HP)、西洋では狂犬病、ペスト、利尿、水腫に効果があるとされていた(東京人形俱樂部あかさたな漫筆HP)。

また、大槻玄沢「蘭説弁感」(1799)の巻之上には「是は此邦にても津軽松前の地に産する「さりがに」というもの、腹中に出来る瘤石なり。「おくり」とは目のこと也。「かんきり」とは「かんける」とい

う間違にて蝦の事也。目といひしは形の似タルより名付けたる也」オクリカンキリとはラテン語 *oculi cancri* で、意味は玄沢の言う通りである(東京人形俱樂部あかさたな漫筆HP)。*oculi* は「目」*cancri* は「カニ」の意である。

さらに、文化三年(1806)から四年にかけて、蝦夷地を旅した東寧元稹は、著書「東海参譚」の中の産物にヲクリカンキリを以下のように記述している。

「ヲクリカンキリ、蘭名はざり蟹、松前方言、タピシツペコロベ、夷言、松前の所々谷川にあり、かたち蝦の如くにして、蟹のはさみ有、走る事至てはやし。是を捕るに驚かし取るべからず、若おどろかし取時は、頭上の珠少なしと、小山蘭山の説也。是は余が藩醫松井策庵に此ものを贈る所に、策庵則蘭山に勘訂せしむるに、ヲクリカンキリ也。しかし、捕る時に騒がしおどろかしたるもの也とて、頭を堅に切割、中より荏子の如き珠を取出し、別につつみ、策庵方へ右のおもむきに申越したりとて、同人余に是をみせしめしに依て是を詳にす。」とある。口語訳すると「ヲクリカンキリはオランダ語で、ざり蟹は松前の方言、タピシツペコロベはアイヌ語。松前の所々の谷川にいる。形はエビのようで、カニのはさみを持っている。走るのがとても速い。これを捕まえる時は驚かして捕ってはいけないもし、驚かして取ると、頭にある珠(ヲクリカンキリのこと)が少ないと、小山蘭山の説である。私が藩医の松井策庵にこれを贈ったところ、策庵はすぐに蘭山に鑑定してもらおうとヲクリカンキリであった。しかし、取る時に騒いで驚かせたものとして、頭を縦に切り割って、中からマメの子のような珠を取り出し、別に包んで、策庵へその様子を伝えると、策庵は私にヲクリカンキリを見せてくれたので詳細に記した。」

「ヲクリカンキリ」は、ザリガニが脱皮準備のために胃に蓄える炭酸カルシウムで、米粒大のもので

あり、脱皮後に用済みとなる古い殻のカルシウム分を再利用するために、新しい殻がほぼできあがり、脱皮が近づくと、古い外殻のカルシウム分を血液に溶かし、胃に集めて結石化させる。これが胃石とも呼ばれるワクリカンキリである。脱皮終了後、胃石を再び溶かし、血液で新しい殻に沈着させていく(佐倉ザリガニ研究所HP)。

このことから、ザリガニを採取する際に驚かせても急に胃石(ワクリカンキリ)が少なくなるわけではなく、脱皮前後のザリガニは、動きがにぶいことから、採取する際に動きがにぶいと、ザリガニをおどろかすことなく採取できたと思い、その個体は胃石が多いと考え、反対に外殻が堅い状態のザリガニは動きが速く、採取する際、すばやく逃げるので、それを捕まえても胃石が少なかったために、驚かせると胃石が少なくなるという説が生じたと推測される。江戸時代には、ザリガニが脱皮するという生態が認識されていなかったと考えられる。

さらに、安政三年(1856年)えりも町内の猿留山道の紀行文を「協和私役」に残している窪田子蔵は、同じ書で、「アツタ(厚田)の北一里シヨロコツ」にて、次のように記録している。

1856年(旧暦:七月八日)「(略)晚餐サルカニと云ものを食ふ。其状大抵鰕魚に似て蟹刀あり。奇形なり。味また鰕蟹のニ味を合わせて少々下味なるものなり。」(日本庶民生活史料集成, 1969)とある。口語訳すると「晚餐にサルカニというものを食べる。その形はだいたいエビに似てカニのツメがある。味はまたエビとカニの味を合わせたものより少し落ちる。」となる。

ザリガニは、馬の上からや歩きながらでは、目に行うことができない生物であることから、同行のアイヌが「ワクリカンキリ」にするためか、食用にするために、ザリガニが多く生息する沢では、足を止

め、ザリガニを採集していたと考えられる。

当時の旅は、馬に騎乗したり、歩行での旅であり、次の宿泊施設へ暗くなる前には到着する必要があったので、ザリガニを捕獲する目的のために長時間かけることはなかったと考えられる。

ニホンザリガニの成体は、6月～10月にかけて1～2回脱皮する(池田啓総監修, 2002)が、個体の成長具合によって脱皮時期が異なると考えられるので、1回100匹程度の捕獲、かつ急ぐ旅の途中であるにもかかわらず、谷元旦はえりも町内(旧:ホロイズミ)において「ワクリカンキリが多く」との記述があることから、えりも町内でもワクリカンキリの採取を目的としてザリガニを捕獲していたと考えられる。しかし、食していた定かな記述はない。

以上のことから、串原正峯大槻が記述した1792年には、ニホンザリガニは薬品の素材として認められ、谷元旦が幌泉(現在:えりも町)を旅した1799年には、ニホンザリガニが東北・北海道に生息していることが広く知られており、松浦武四郎が旅した1800年代半ばには、ニホンザリガニが「ワクリカンキリ」の採取および食料として、積極的に採取されていたことが伺える。

アイヌはザリガニを神として祭事に用いており、本来より食品として活用されていたか否か今ではわからない(萱野志郎, 私信)が、江戸時代から和人が蝦夷地に進出するにしたがい、薬品の原材料として採取するとともに、食する習慣が広まったと考えられる。

## 2. 東洋小学校の「総合的な学習」

平成12年度、えりも町立東洋小学校で“総合的な学習”を視野に入れた「自ら学び、豊かに表現する子供の育成」～オリエントタイムの活動を通して」を研究主題とすし、東洋小学校としての“総合的な

学習の時間”に取り組み、3・4年生は環境分野で、「絶滅危惧種・ニホンザリガニのくらしをさぐる」という課題で、7名の小学生が学習に取り組んだ。指導担当は、本山裕一教諭であった。えりも町内でのザリガニ調査の記録がないことから、小学生の視点での調査であるが、貴重な情報が多いことから、関係者の承諾を得て、今回、ここに報告することとする。

オリエンタイムでの授業の進め方などについては、東洋小学校研究紀要「潮風」第32号（東洋小学校、2001）に詳しく記載されているので、参照していただきたい。ここでは、調査結果について記載し、若干の考察を加える。

“総合的な時間”の学習では、下調べの後、聞き取り調査、現地生息調査を実施し、その成果を、学習発表で報告した。その報告資料を、そのまま次に示した。また、まとめについては、研究紀要「潮風」第32号（東洋小学校、2001）より引用した。

#### 1 > 聞き取り調査について

聞き取り調査の対象者は、7組（8名）である。

質問1) ザリガニをつかまえてとったことがありますか？

- ・ある（小学生の頃）6人
- ・ない 1人

質問2) ザリガニがいた場所を地図に書いてください。（省略）

質問3) その頃のザリガニの様子を何でもいいので教えてください。

- ・たくさんいた。
- ・焼いて食べるのが楽しみだった。
- ・すり鉢ですって薬にして飲んだ。
- ・おなかに卵を持ったザリガニを飼っていたら子供が産まれた。

- ・前進、後進ができる。

質問4) ザリガニは絶滅危惧種です。知っていましたか？

- ・知っていた 4人
- ・知らなかった 3人

質問5) お願いしたらザリガニのいる場所に案内してもらえますか？

- ・はい 1人
- ・いいえ 6人

質問に答えてくれた人は、

Aさん（昭和41年生）、Bさん（昭和34年生）、Cさん（昭和14年生）、Dさん（昭和28年生）、Eさん（昭和11年生）、Fさん夫婦（昭和35年・31年生）、Gさん、（大正13年生）。

#### 2 > ザリガニについて

児童が、様々な情報媒体から調べ学習をして、まとめた成果を発表している。ここでは、小学校3・4年生が、興味を持ち、調べたことについて、今後の参考となることから、そのまま記載しておく。

- ・ニッポンザリガニ、ヤマトザリガニとも言われている。
- ・日本の固有種。
- ・山の周縁部で湧き水が流れる溝や小沢に多く、また山間のわずかな水の流れる小川にも生息する。
- ・我が国固有の種類であることからニホンザリガニ、あるいはヤマトザリガニとよばれている。
- ・大きさはせいぜい5～6センチ。
- ・目と目の間にある大きなとげのような額角が、やや丸みを帯びているのがザリガニで、鋭くとがっているのがウチダザリガニ。
- ・かつて山間部や平地の湧水域に普通にいたが、今ではめったに見られなくなった。

- ・気温が 10°C 以下になる秋から初冬にかけて交尾する。
- ・産卵期は、年 1 回、3～4 月で、ふ化するの 6～7 月である。
- ・産卵期は、年 1 回、3～4 月で、ふ化するの 6～7 月である。
- ・北海道のほか、青森・秋田・岩手の三県だけに生息が限られる。
- ・分布南限の秋田県大館市八幡沢は、ザリガニの生息地として、昭和 9 年 (1934 年) に国の天然記念物に指定されている。
- ・どの地域でも、湧水の汚濁、あるいは枯渇によって、その生息が脅かされているのが、現状である。
- ・ザリガニは大きなはさみがあるので、カニのような名前がついているが、本当はエビの仲間。
- ・アメリカザリガニは 1930 年食用ガエルを養殖するためのエサとして持ち込まれたものが逃げ出して増えたのだと言われている。
- ・アメリカザリガニは土に穴を掘って巣を作る。
- ・アメリカザリガニの成長  
メスは夜、体を横にして卵を産みます。そして、腹脚につけます。卵から孵ると、母ザリガニは子ザリガニを腹の下に抱いて、エサが採れるようになるまで育てます。子ザリガニは昼は母ザリガニの下に隠れています。そして、夜になると腹から離れてエサを探します。少し大きくなると母親からはなれて 1 匹で暮らします。堅い殻に覆われたアメリカザリガニは成長するために脱皮して、殻を脱ぎ捨てます。何回かの脱皮をして大人のザリガニになります。
- ・アメリカザリガニの体  
はさみ：獲物を取るときや、仲間とけんかする時などに使います。

はさみあし：メスのはさみあしはオスより小さいです。

あごあし：食べ物を口に運ぶ役目をします。

ふくきやく：メスの腹脚は長く、卵や子ザリガニをつけて守るのに使われます。

しよ角：ものに触って、味などを感じます。

大あご：エサを噛み切ります。

口：ザリガニは魚の死骸や水草などを食べる。

大きなハサミでエサをしっかりとはさみ、あごあしを使って口に押し込みます。

目：飛び出しているの、どの方向も見ることが出来る。また、目の下の穴に砂を入れてバランスをとってある。

腹：メスは産んだ卵を腹の下に抱えて守る。卵は生まれてから 2 週間ほどでかえる。

尾：逃げる時は尾で水をかいて、後にジャンプする。

### 3 > ザリガニ・マップ

これは、児童が 6 地点についてザリガニの生息調査をおこない、簡単な図にその結果を示したものである。しかし、ここでは、ザリガニの生息地保護のため、K・A・Y・N・AC・S と表し、その結果を報告する。

K 北側の沢・8 匹 (63 ミリを見つけた)

A 南側の沢・1 匹

Y の沢・1 匹 (カジカがたくさんいた)

N 南側の沢・7 匹 (大きなザリガニはいなかった)

AC 奥・5 匹 (卵を持っているザリガニもいた)

S 南側の沢・5 匹

### 4 > まとめ

児童 1：地域のおじいさんやおばあさんの話では、昔は「サルガニ」と呼んでいて、たくさんいたそ

うです。煮て食べたという人もたくさんいました。なぜ、こんなに少なくなってしまったのでしょうか。私たちは、この勉強をしながらザリガニが減ったわけを、次のように考えてみました。

児童2：第一に水が減ってしまったこと。

児童3：この川は、昔、子供の腰ぐらいまで水があったといいます。今は長靴で川の中を歩けるくらいに水が減っています。

児童4：第二は、水が汚れてしまったことです。

児童5：水が汚れた原因は、人間が使った水が流れ込む、肥料などが流れ込む、牛の尿や糞が流れ込むなどが考えられます。

児童1：そのことで、ザリガニのえさになる川の生き物も減ったと思われます。

児童6：第三は、「護岸工事」でザリガニのすみかが狭くなったことです。

児童7：湧き水が出る、綺麗な谷川に住むザリガニは、コンクリートの壁ができてしまうと、まったく住めなくなります。

児童1：私たちは、時間があれば、これらのことをもっと詳しく調べてみたいと思いました。

児童6：とにかく、ザリガニが住める場所がこれ以上減ってしまわないようにしないといけないと思います。

児童3：これで、3・4年生の発表を終わります。

全員：終わります。

### 5 > 考察

アンケートに答えた地域住民は、年齢層がばらついているが、小学生時代にザリガニを見ている人がほとんどである。また、「たくさんいた。」「焼いて食べるのが楽しみだった。」「すり鉢ですって、薬にして飲んだ。」「煮て食べた。」との発言から、ザリガニは身近な存在で、人々の食文化と密接な関係があっ

たことが推測できる。

小規模な河川改修、森林伐採と放牧地化など周囲の環境悪化が、昭和から平成にかけて生じてきたが、児童たちの現地調査により、調査した6沢のすべてにニホンザリガニが生息していたことから、ニホンザリガニが生息できる環境が、えりも町内に少なからず残っていることが明らかになった。

また、ニホンザリガニ同様、清流域を生息地にしているカジカ（種不明）が、多く生息しているとの報告は貴重であり、再調査を実施し、保全について検討するべきであろう。

### 3. 聞き取り再調査

東洋小学校総合的な学習での聞き取りに「薬にして飲んだ。」と記録されている。これは池田彦左衛門氏（大正13年生まれ、字東洋）からの聞き取りであり、再調査すると以下のことが判明した。

『数えて18～19歳の時（昭和16年頃か）、軍隊に行った兄が肺病（結核・乾酪変性症）になり、浦河の日赤に入院していた。月に1～2回程度しか見舞いに行けなかった。バスで行った。同室の人も結核であった。静内から浦河の高校に通っているその人の妹が、毎日、ザリガニを生のまますり鉢ですりつぶした生汁を小瓶に入れて持ってきて、飲ませていた。ザリガニのお陰かどうかわからないが、静内の方は快方に向った。小学生の頃、ザリガニを食べた。ある沢（坂下）には、ザリガニもカジカもたくさんいた。捕る気になればすぐに捕れた。なんぼでもいた。囲炉裏や薪ストーブの熾きで焼いて、赤くなってきたら皮のままガリガリ食べた。食料という感じではなかった、おやつみたいなものだった。夏はコンブの手伝いで忙しかったから、ブドウとか山に採りに行ったときに捕ったのかもしれない。20cmぐらいのカジカもたくさんいた。カジカは串に刺し

て焼いて乾かして出汁にした。(2003.2.19.電話調査)(2003.2.22 訪問取材)』さらに、再聞き取り調査の際、入手した情報を記録しておく。

#### 1) 松前町の情報

池田和枝さん(字東洋)は松前出身で、平成16年で86歳になる松前の父親が、10年ぐらい前に、池田和枝さんの子供が熱を出したとき、ザリガニをつぶしてガーゼにくるんで頭に巻けば、熱が下がるという、バケツ一杯に獲ったが、えりもに持ってくる途中で死んでしまった。松前では「ザリガニ」ではなく「さるがに」と呼んでいた。

#### 4. おわりに

東洋小学校での総合的な学習の時間において地域学習のテーマとして「ニホンザリガニ」がテーマとして取り上げられ、児童が調べ、現地調査をおこなひ、まとめの発表をおこなった。郷土資料館として、地域の情報を記録し残すことは、極めて重要であるため、加筆し報告した。総合的な学習に取り組んだ児童の記念になれば幸いである。

また、現在でも町内の各地にニホンザリガニが生息している可能性が高く、生息状況調査を実施し、保全についても検討していく必要がある。また、ニホンザリガニを環境指標生物としてとらえ、町内在住者からかつての生息状況について聞き取り調査することは、生息状況の変遷、えりも町内の里山の自然環境の変遷について、検討を加えることができると考えられる。

さらに、「さるがに」「ざるがに」「しゃりがに」「ザリガニ」などニホンザリガニの呼び方が、一つではないことが確認されていることから、今後、より詳細な調査を実施し、えりも町内の各地域、各世代のニホンザリガニの呼び方の時代変遷について検討を加えたい。

#### 5. 謝辞

末筆ながら、東洋小学校における総合的な学習における学習成果の発表の記載について快諾していただいた東洋小学校北嶋和幸校長、鈴木博信教頭および関係者の方々、アイヌの習慣について助言をいただいた平取町萱野志郎氏、帯広百年記念館内田祐一氏に、心から感謝の意を表します。

#### 6. 引用文献

えりも町郷土資料館(2003)「えりも町ふるさと再発見シリーズ3 猿留山道」. 8-9. 猿留山道復元ボランティア実行委員会.

池田啓総監修(2002)「週間日本の天然記念物動物編ニホンザリガニ」. pp35. 小学館.

萱野茂(1996)「萱野茂のアイヌ語辞典」. pp597. 三省堂.

松浦武四郎(1845)「蝦夷日誌一編」. 秋葉實翻刻・編. 291-292. 北海道出版企画センター(1999 発行).

長崎大学薬学部HP(2004 検索) <http://www.ph.nagasaki-u.ac.jp/history/history2/18dou.html>

日本庶民生活史料集成.(1969) 窪田子蔵著「協和私役」p232. 三一書房.

日本庶民生活史料集成.(1969) 東寧元稹著「東海参譚」p39. 三一書房.

更科源蔵(1976)「コタン生物記II 野獣・海獣・魚族篇」489-490. 法政大学出版局.

谷元旦(1799)「蝦夷紀行」. 佐藤慶二編. 朝日出版. p53.

東京人形倶楽部あかさたな漫筆HP(2004 検索) <http://homepage.3.nifty.com/~com/~akusatana/akusatana14.html>

東洋小学校(2002)「オリエンタイム環境分野の活動案3・4年」研究紀要「潮風」第31号.30-35.